

エントリー名：愛媛県立丹原高等学校

活動名：“やってみよう”が生まれる学校 ～生徒も先生も主役となる探究文化の醸成～

解決すべき課題：今から5年前、当時の丹原高校は、日本の多くの地域同様、少子化の影響から受検者・入学者が減少傾向にあり、学校存続の危機を背景に、学校の魅力化が強く求められていた。その上で、私たちが注目した現状と課題は、①普通科と園芸科学科を併設する学校であったが両学科の交流は十分でなかったこと、②新学習指導要領の実施に伴い「総合的な探究の時間」の改革が急務であったこと、③生徒は日々の学びや生活に「おもしろさ」や「魅力」を見出しにくい状況にあったこと、④教職員も多忙感から自ら学ぶ姿勢や新しいことへの挑戦が難しく、創造的に挑戦できる環境が不足していたことである。

目標・方針：二学科併設校の特色を活かし、両学科の学びや資源を共有することで生徒と教職員が共に成長できる学校づくりを目指した。そのために、①独自性の高い「総合的な探究の時間」の構築、②生徒や教職員の「やってみよう（＝探究）」に光を当て探究文化を醸成、③学校で生まれる各取組を「私たちの取組」として感じられる環境を整え、共有と共感を通じて共創を生む、を活動方針とした。生徒にとって「おもしろい学び」、教職員にとって「やりがいある学校」を実現する。そして両者の探究が日常となる環境づくりに挑戦した。

活動内容：

学校コーディネート機能の基盤づくり（令和3年度）

【背景】新しい視点で現状を見直し、学校全体の状況把握を重視。二学科併設校ならではの実情や、探究の受け止め方を確かめつつ、次年度への方向づけが課題であった。

【取組】積極的なコミュニケーションや参画を通じて現状を把握し、管理職と課題を共有した。さらに、授業やホームルーム活動、課外活動で探究的な学びを試行・公開し、生徒・教員の反応を確認。活動を通じて課題の解像度が高まり、学校コーディネート機能の基盤となった。

t-timeの構築と実践 — 生徒の探究の場づくりを教員の協働探究として（令和3・4年度）

【背景】学校全体の状況把握の取組を経て、前述した4つの課題が明確化した。一方で、管理職の柔軟な経営観、探究的な学びに関心を示し議論に加わる教員や共有されるべき実践、そして新しいことを「おもしろい」と感じる生徒の存在など、学校魅力化につながる資源も見えてきた。

【取組】課題と資源を基に、総合的な探究の時間「t-time」を構築・実践した。「ヒト・モノ・コトとの新たな出会い」をコンセプトに、異学年・異学科混合の学びとして地域人材と協働する探究型プログラムとした。生徒には探究の場が、教職員には学びを共に創る場が生まれた。

プロジェクト「tanomo」の旗印化 — “やってみよう”でつながる学校（令和4・5年度）

【背景】校内には生徒・教職員の注目すべき多様な取組があったが、共有は表面的で「バラバラ感」があった。また、探究は「総合的な探究の時間」に留まり広がりや欠いていた。そこで、探究資源を共有し、生徒・教職員双方に主体性を促す仕組みづくりの必要性を感じていた。

【取組】「やってみよう」を合言葉に、プロジェクト「tanomo」を学校全体の旗印として掲げた。これにより多様な取組を束ね、活動の可視化と共感を促した。取組を「私たちの取組」として感じられる雰囲気を広げ、参画や協働につながる土壌を整えた。また、「やってみよう（＝探究）」の担い手を生徒だけでなく教職員・地域へ広げ、共に主役となる探究のイメージを広げた。

※令和4年度末に、愛媛県立学校振興計画（令和5年3月策定）が公表され、丹原高校を含む近隣3校の令和9年度末での閉校と、新たに2校を令和8年度に開校することが正式に決定した。これに伴い、令和6年度募集（＝令和7年度入学生）を最後に、生徒募集を停止した。

学校コーディネート機能の制度化 — “やってみよう”を支える仕組みづくり（令和5・6年度）

【背景】学校魅力化や探究活動の充実を求める声が教職員の間に入り、個々の実践を超えて学校全体で「やってみよう（＝探究）」を支える仕組みの必要性が共有されるようになった。また、

地域社会とつながり、生徒や教職員、学校活動をマッチングする役割も求められるようになった。
【取組】令和5年度に「情報・企画課」を新設し、令和6年度には「振興・企画課」へ改編した。これにより、学校コーディネート機能が校務分掌として制度化され、生徒・教職員・地域の「やってみよう」を受け止める窓口が明確化された。制度化によって継続性が担保され、「やってみよう（＝探究）」を共有・共感・共創へつなげる仕組みが確立した。

TANKO UPDATE PLUSの定着 — 最後まで動き続ける学校への挑戦（令和7年度）

【背景】令和7年度は、3学年がそろそろ最後の年度であり、翌年度以降は生徒・教職員の減少が見込まれている。こうした状況だからこそ、今ある人材や資源を活かし、「今だからできる学び」を創り出す仕組みと、「私たちの学校」を共に描く文化づくりが必要であった。

【取組】「TANKO UPDATE PLUS」を合言葉に、学校全体で「動き続ける学校づくり」を展開した。行事や日常活動を再構築し、生徒・教職員・地域が協働して「今だからできる挑戦」を企画・実践した。生徒が学校運営に主体的に参画する体制を整え、教職員も柔軟に役割を見直し、両者の個人探究・協働探究が新たな学校文化の継承と創出につながるよう図った。

取組の過程：

積極的雑談による「得意」と「困った」の把握

職員室や教室での「積極的雑談」を通じて、教職員と生徒の「得意」と「困った」を把握。個々の声を学校全体の資源として活かし、協働の基盤を築いた。

積極的おせっかいによる教科・分掌の横断

教員同士の実践や企画に積極的に首をつっこみ、教科や分掌を越えた連携を促進。小さな協力の積み重ねから、自然な協働文化を育んだ。

「らしさ」と「わかりやすさ」を重視したブランディング

「やってみよう」をはじめ、「t-time」、「tanomo」、「TANKO UPDATE PLUS」など、誰もが親しみを持って、かつ、マイブランドを意識できる言葉で取組を表現し、参加意識と一体感を高めた。

不完全さを残すデザイン

あえて完成形を示さず「余白」を残すことで生まれる「物足りなさ感」を大切にし、生徒・教職員の「もっとこうしたら…」を引き出し、次の展開を共に創り出す仕組みとした。

内から外へ、外から内への広報設計

発信を通して外部の学校への興味・関心を高める「アウトプロモーション」と、外部の評価や共感の声による校内意欲の向上をねらう「インナープロモーション」を循環させた。

“〇〇だからできる”発想

制約や課題を前向きに捉え、「今だから」「この学校だから」「このメンバーだから」できる挑戦へと転換し、「私」や「私たち」が主役と思える環境を整えた。

活動の成果：

※以下のタイトルの「 」内は、実際に生徒たちから伝えられた声です。

①「私たちはチーム『tanomo』です」 — ごちゃまぜ探究と協働文化の定着

普通科×園芸科学科、生徒×先生、学校×地域…垣根を越えた探究活動が日常化。互いの「得意」を活かし合う「ごちゃまぜ」の協働文化が新たなプロジェクトを次々と生み出すようになった。

②「先生、私〇〇をやってみようなんですけど…」 — 探究推進体制の確立と仕組み化

t-timeにより探究が根つき、プロジェクト「tanomo」から多様な探究が生まれるようになった。学校コーディネート機能の充実により、「やってみよう」を受け止め、形にする体制が整った。

③「私たちの創る学校はおもしろい！」 — 生徒の主体的学びと学校参画の拡大

とある教員の「やってみよう」から始まったルールメイキングプロジェクトにより、ルールづくり＝学校づくりの意識が定着。チーム「tanomo」の協働的な学校づくりが魅力化へとつながった。

④「丹高の先生たちって楽しそう」 — 教職員の協働探究文化の醸成

教員の「やってみよう」の声が増え、互いに学び合い支え合う文化が醸成された。教員自身が探究者として挑戦する姿が、生徒や地域に新たな刺激を与え、学校全体の活力へとつながった。